第７章　キリストの生涯と働きにおける祈り⑧

十字架上の祈り

十字架上の恐ろしい試練の中で発せられたイエスの祈りは、二つの簡潔なものしかありません。最初のものには、人間キリスト・イエスの目に神から完全に見捨てられたと映ったところに対する、まったくの落胆が見られます。後のものには、自らを神に完全に明け渡す宣言が見られます。

十字架上での最初の祈りは、十字架刑の終わり近くで発せられました。**「『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』……それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である」（マルコ 15:34、またマタイ 27:46 参照）**。これは、恐ろしい暗闇を体験し、その身にほとんど負えないほどの肉体的な苦痛を体験し、完全な孤独の感覚を体験されたイエスの叫びでした。この叫び声は、居合わせたほぼ全員が耳にしたことでしょう。これを聞いた人は、苦痛に満ちたその叫びを生涯忘れることができなかったのではないでしょうか。神の心は、この懇願の言葉に引き裂かれたに違いありません。しかし、それでもなお、贖いのご計画を完成させるためには、父なる神は御子をしてその恐ろしい時を最後まで過ごさせなければなりませんでした。例えばパウロの体験が示しているように（ピリピ 3 :10 参照）、神のしもべたちもまた、今なお同様の孤独を感じる時があるかもしれません。

この祈りは、短い文ではありますが、非常に深く考えさせられるものとなっています。神は本当に御子を見捨てられたのでしょうか。神がご自身のものを見捨てられることがあるのでしょうか。御父は、御子が私たちの身代わりとなってその身に負われていた罪や不義を受け入れることはできなかったとはいえ、依然として御子を愛しておられました。神をそこまでして呼べる人は、見捨てられたという感覚をどれほど抱いているにしても、それでも神と共にあるものです。叫びにならない叫びに対して、あるいは絶望の淵からの願いに対しても、父なる

神は応答してくださいます。自分が見捨てられているかもしれないということに無頓着な者のみが、真に孤独な者であるのです。

イエスの叫びは、詩篇 22 篇をアラム語で引用したものですが、これはまた、イエスが十字架上の苦難の表現としてこの詩篇に訴えたものでもありました。この詩篇はそのことを念頭において読まれるべきものです。

イエスの絶望の祈りは聞かれました（ヘブル 5:7 参照)。見捨てられたという感覚の、激しい苦痛は長くは続かず、神のご計画にとって必要な長さだけ続いたのでした。私たちも同じです。深い絶望の淵に見舞われるとしても、思い出しましょう。神は聞いてくださっているのです。

> **キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。(ヘブル 5:7)**

十字架上での第二の祈りも、同じく簡潔なものでした。**「父よ。わが霊を御手にゆだねます」(ルカ 23:46)**。このように祈られてイエスは息を引き取られました。ここにあるのは、あまり多くの人が祈ることがないと思われる祈りです。もちろん、このように祈る人もあります。火刑の場へと引かれていく中で敵に嘲(あざけ)られたジョン・フス（1369-1415 宗教改革の先駆者）は、確かな信仰と神学的な正確さをもって語りました。**「私を贖ってくださった主イエス・キリストよ、我が魂をあなたの御手に委ねます」**。　私たちは死の瞬間にあっても、このような同じ祈りを捧げる機会に見舞われることはないかもしれません。しかし、主に仕える日々の中で、自分の生涯をこのようにお捧げすることはできるでしょう。

《学びのための問い》

1．イエスは定期的に祈っておられましたが、その理由は何だったでしょうか。

2．ペテロのためのイエスの祈りは、私たちのためのイエスのとりなしについて何を教えてくれているでしょうか。

3．ラザロの墓におけるイエスの祈りは、人前での祈りと隠れた場所での祈りについて何を教えてくれているでしょうか。

4．ヨハネ 17 章におけるイエスの祈りについて、私たちはどんな側面を自分自身の祈りに適用できるでしょうか。

5．神はご自分のものである人々を本当に見捨てたり見放したりされるでしょうか。